

ミャンマー連邦共和国と日本の建設業における女性活用の現状と意識調査

株式会社熊谷組 国際支店 正会員 ○濱 慶子

1. はじめに

ミャンマー連邦共和国（以下、ミャンマー）はインドシナ半島西部に位置する共和制国家で、最近では政権交代の様子やアウンサンスーチー氏の話題が日本でも大きく報じられた。

日本では女性活躍推進法が成立し、建設業界では「ドボジョ（土木女子）」「けんせつ小町」という言葉がもてはやされている印象があるが、ミャンマーの建設業界ではすでに数多くの女性が就労している。本稿では、ミャンマー及び日本において、建設業に従事する男女の意識調査を行った結果を報告する。

2. 調査方法

調査は個別にインタビュー形式で行った。調査対象は、建設業に従事する女性と、女性技術者と協働した経験のある男性とした。

調査母数を図1に示す。図で示す通り、日本では女性の建設業従事者が少なかったため意見の収集が難しかった。逆にミャンマーでは女性が数多く働いていた為、今回の調査結果を単純に比較できるものではないが、意見の傾向のみを比較するのであれば興味深い結果が得られたと考えている。

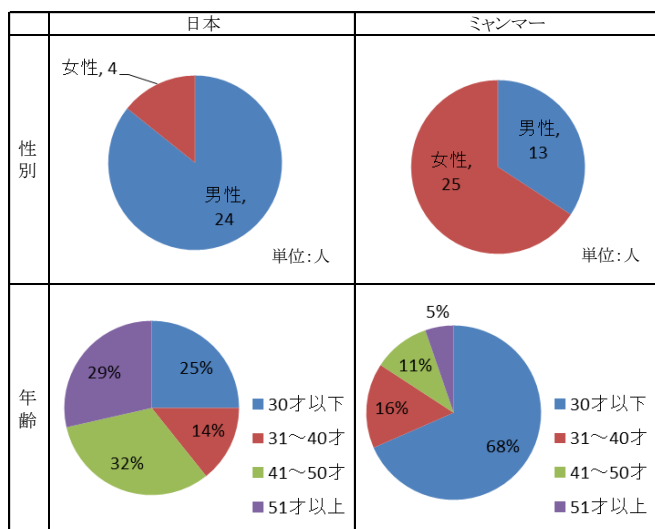
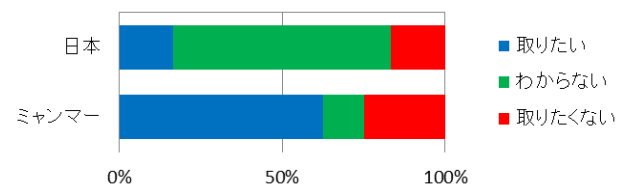
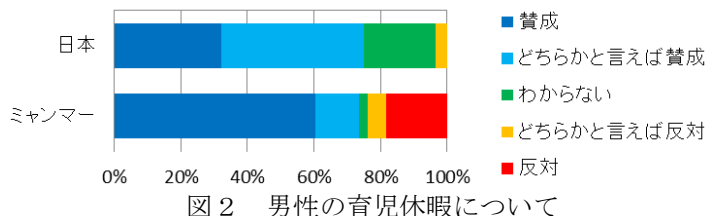


図1 調査母数

3. 調査結果

1) 男性の育児休暇について (図2, 図3)



男性が育児休暇を取得することについては、ミャンマー、日本共に「賛成」「どちらかと言えば賛成」という意見が多かった。ただしどちらの国でも、制度としては賛成だが実際は「業務が繁忙である」「引継ぎができる環境にない」為、取得は困難であるという意見が多く聞かれた。次に子どものいない男性に、育児休暇を取得したいかと質問したところ、ミャンマー人男性では取りたいと回答した人が多かった。その内訳としては、「子供が小さいうちは父親も育児に参画するべきだ」という意見が多かった。一方日本人男性では、「取らなければいけない事情があるならば取りたいが、業務が繁忙であるため分からない」という意見が最も多かった。(図3) また、ミャンマー側の意見として特徴的だったのが、男性の育児休暇には「反対」「どちらかと言えば反対」という意見にも票が集まった点である。その理由は、「収入が減るのは困る」「父親と母親の果たすべき役割は違う」といったものだった。経済成長著しいミャンマーでは家庭を重視する人が多い傾向はあったものの、収入を重要視する人が増えてきているものと考えられる。

キーワード ダイバーシティ, 女性活躍推進, ミャンマー, 土木女子, けんせつ小町
 連絡先 〒162-8557 東京都新宿区津久戸町 2-1 (株)熊谷組 国際支店 TEL 03-3235-8639

2) 仕事で性別の差を感じることはあるか (図4)

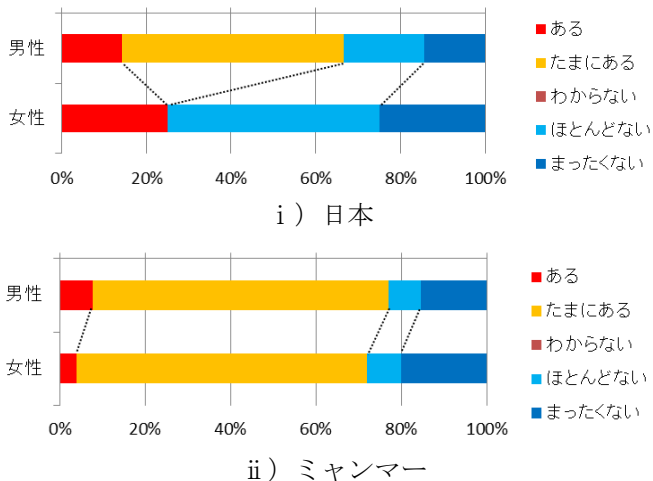


図4 仕事で性別の差を感じることはあるか

日本人女性以外では、7割程度の人が「ある」「たまにある」と回答した。日本人男性からは、「体力面で男性と異なるため、男性と全く同じ仕事はさせられない」という意見が多い一方で、「体力が問題になる職場であれば環境を改善することで解決が可能。職場環境（安全、労働時間等）の改善が喫緊の課題である」という意見も散見された。また、「女性は男性に負けたくない」という気持ちが強いと感じるが、そう思わない方がお互いにうまくいくと思う」という意見があった。その意見を踏まえて日本人女性の回答を見てみると、日本人女性の真面目さ、負けん気の強さが「まったくない」「ほとんどない」という回答の多さに繋がったのではないかと推測される。

一方、ミャンマーでは男女共にほぼ同じ割合の回答となった。ミャンマー人男性・女性共に、日本人男性と同様に体力面に関する意見が多く挙げられた。ただし、職場環境の改善が必要という回答はひとつも出てこなかった。ミャンマーでは実際に多くの女性技術者が働いており、作業所長たちからは「女性の方が品質管理に向いている」「現場での品質管理は女性の将来のスキルアップに繋がる」という意見が聞かれた。ミャンマーでは個人の特性や能力に合わせて作業を分担して働いているケースが多く見られるため、女性が普通に働くことができているのだと考えられる。ただし、労働力が豊富で建設業の人気も高いミャンマーでは日本の同程度の規模の作業所と比較して職員が2～3倍程度多く在籍しているように見受けられたため、残業時間が少なく、この点に関しても単純比較はできない。

3) (一般職層の方への質問) 将来の目標があるか

役職のついていない若い技術者に向けた質問として、将来の目標を尋ねたところ、ミャンマーではほぼ全員が明確な目標を口にした。「今の仕事でトップに立ちたい」「マネージメントクラスになりたい」という強い上昇志向を全員が口にした。日本では、特に目標は無いという意見も散見され、目標があると答えた人も給料や役職のことを口にするのでは無く、どのように働きたいかという働き方についての目標を答える人が多かった。ここでもミャンマーの経済発展の一端を感じることができた。

4. まとめ

ミャンマーでは多くの女性が建設業に従事している。(写真1、写真2) 個人の特性や能力によって仕事を分担し、スキルアップと作業の効率化を図っており、日本も学べる点が多いと感じた。

また、労働力が豊富で建設業の人気が高いため、ひとつのプロジェクトに携わる職員数が多く、日本と比較して残業時間が短い。

本調査結果から、日本の建設業界が男女のみならず、多様な個性を持つ集団としてみな働きやすい職場となるために、労働時間の短縮や賃金のアップ等の職場環境の改善、そして女性自身も含めた個々の意識改革が必要なのではないかと感じた。反対にミャンマーでは安全面の改善や、作業の機械化を進めることで作業の効率化が進み、不公平感の無い職場環境に改善することができると考えられる。



写真1 先輩から指導を受ける若い技術者



写真2 土工事の指示をする副所長(中央)